

トロッコと彩雲

大府町の地に転住してきたことは、前の項目で既述したが、住居は父の勤務先の社宅であった。隣には花井組という土木建設業を営む会社があった。その敷地内には、創業者花井郁次氏の長男として、後に二代目を引き継ぐ花井勝美夫妻が新居を構えていた。

花井秋子夫人は気さくな性格で、社宅に住む多くの主婦達と親しく付き合っていて、とりわけ私の母とも馬が合ったようで、また社宅の子ども達とも気兼ねなく遊んだりしてくれていた。

主人の花井勝美氏は、小柄な体格に似合わず大きな声の持ち主で、てきぱきと部下に仕事を指示する声が、我が家にも響いてきて、子供心に気骨のある人物との印象を持っていた。

当時、既に朝鮮戦争の真っ只中であった。日本と目と鼻の先の朝鮮半島で死闘が演じられていたこの頃、日本は信じられないほど平穏で、気味の悪いほどの無関心とも思えるほど落ち着いた空気に包まれていたのであった。

戦後の荒廃からようやく復興が軌道に乗り初め、朝鮮戦争による「朝鮮特需」による景気に弾みがついて、建設業は経済復興の担い手としての役割を果たすようになっていた。花井組は愛知県知事登録の建設業（土木）として正式に登録され、土木の仕事を通じて地域振興に貢献する事業の地歩を固めていた。

その頃、農閑期となれば、大勢の東北地方から来た季節労働者の姿が敷地内に溢れていて、一手に秋子夫人らが、季節工達の日常の世話をしている姿が目立ち始めていた。季節工がコンクリートの型枠や鉄筋を折り曲げる作業を、私は物珍しく眺めていて、毎年の恒例の行事となっていた。

工事現場では、まだスコップやツルハシで土を掘り起こし、トロッコで土砂を運搬するという人力作業に頼っていた。資材置場にはトロッコのレールが山積みされていた。

トロッコと言えば、現在観光地でよく見かけるトロッコ列車のイメージが強いが、トロッコ列車とは、一般的な鉄道よりも規格が簡便で、安価に建設された軽便鉄道のことだ、レールは地表と固定されている。

土工用のトロッコは、工事現場へ枕木ごと容易に移動が可能なように、小型化・軽量化したもので、人力で押して走らせる手押し車に近かった。積み下ろしがし易いように箱の部分を横倒し出来る構造になっていた。

このトロッコのレールが山積みされていた資材置場は、近所の子供達にとっては格好の公園代わりとなり、まるで巨大なジャングルジムという遊具にもなっていた。

しかし、レールの山積みが崩れる危険性もあり、花井勝美氏に見つかれば怒鳴り声を浴びて、子供達は蜘蛛の子を散らすように逃げ帰って来たが、工事現場に居る花井勝美氏の留守を狙っては、資材置場で遊ぶことを繰返していた。

小説家の芥川龍之介が、一九二二（大正十一）年に発表した短編小説「トロッコ」は、

中学校の教科書に採用され、確か学んだ記憶があった。私は小説の内容より、既にその当時にトロッコが存在していたことに興味を持っていた。

一九五四（昭和二十九）年に、保安隊（自衛隊の前身）の「演習訓練」を以て雨兼池（現・大府市役所敷地）の埋立工事が着工された。豊川市の保安隊基地が大府作業隊一七五名を編成して、近代土木建設機械が威力を発揮して完成した。ブルトザー・ダンプカー・ショベルカーなどの脅威的な動きを、驚きの目で見ていた少年の一人であった。

一九五六（昭和三十一）年に発表された経済白書の結語には、「もはや戦後ではない」と記述され、流行語にもなっていた。戦後復興の時代から今後の日本は、社会の近代化による安定した経済成長によって、成し遂げられることを宣言するものであった。

一九五七（昭和三十二）年に、愛知用水工事が着工された。「木曾川の水を知多へ」という願いを実現するために、世界銀行の融資を受け、米国の先端土木技術・建設機械を導入し、四年後の一九六一（昭和三十六）年に通水をみた。

次第に、「トロッコ」は、近代土木建設機械の進出により、過去の土木用設備として、忘れられた存在となってしまうていた。

一九五九（昭和三十四）年九月、未曾有の被害を出した伊勢湾台風が襲来した。私たち家族が住む社宅が危うくなり、真夜中に隣の花井家に逃げ込んで、難を避けたことがあった。

その頃、花井組は愛知県から請け負っていた現在の東海市の伊勢湾に面した工事現場

で、花井社長らが、逃げ遅れた住民たちの救助活動が続けていた。後日、横須賀町（現・東海市）から感謝状が授与され、マスコミにも掲載されたが、

「災害時、最初に駆けつけるのは地元建設業者。日頃から何をすべきか地域と一緒に考えた
い」

と、花井社長は述懐していた。

その後、大府地区には大型台風や集中豪雨が数多く襲ってきたが、花井組はその都度、社員全員が一丸となり、使命感を持って人命救助や復旧作業に当たっていたのである。

それから数年後、私たち家族は社宅から新居へ転居してしまったが、六〇年余の星霜を経た今でも、懐かしいトロツコの風景や花井社長から叱られた大声だけは、未だに懐かしい少年期の残照を見る思い出がして来るのであった。

ここ数年来、知多半島の戦争遺蹟を調べる機



会が多くなってきた。太平洋戦争の戦時下に於いて、突如、航空機に関する巨大な軍需工場や軍事施設が知多半島に進出してきたのであった。その進出した軍需関連施設等というのは、中島飛行機半田製作所（半田市）、河和海軍航空隊（美浜町）、三菱名古屋航空機大府飛行場（大府市）の三か所であった。

調べている中で、中島飛行機半田製作所の「彩雲（さいうん）」が、どの軍用機関係の書物を読んでも、評価が高いのに興味を持ち始めていた。彩雲は、太平洋戦争中期から運用した艦上偵察機であった。彩雲の名称は、虹色に輝く雲を意味する吉兆天象が由来であった。

第二次世界大戦中では唯一、偵察専用として開発された彩雲は、主要な武装兵器を持たず、戦局を変える程の航空機では無かったが、敵の戦線深くまで侵入して、高速を利して大いに偵察任務に運用された。

追撃してきたアメリカ戦闘機を振り切った時に発信した「我に追いつく敵機無し」の電文は、彩雲の世界的な技術水準を示す有名なエピソードとなっていた。一方のアメリカは、この種の専用機を開発せず、もっぱら戦闘機や爆撃機を改造して偵察任務に当てていたのであった。

二〇一九（令和元）年に、花井組の花井勝美会長が、九十五歳で天寿を全うされた。「お別れの会」が催され、花井勝美会長の略歴には、業界団体（愛知県農業土木研究会等）、経済団体（大府商工会議所等）、慈善団体（大府ライオンズクラブ等）、文化団体（日

中友好協会等)、宗教団体(熱田神社等)など諸団体の要職を歴任していたことが紹介されていた。

ふと、花井勝美会長の青年期の略歴に目を落とすと、花井会長は海軍航空隊に入隊し、各地を転属し、終戦時には中島飛行機半田製作所で「彩雲」偵察機の製造を監督していたことを、この時初めて知ったのであった。

農家に従事していたばかりと思っていたが、死線を越えてきた海軍軍人であったのだ。子供心に、きびきびした態度や気骨のある人物として畏怖の念を抱いていたことに、ようやく納得したのであった。

何故か「トロッコ」や「彩雲」の思い出が、タイムスリップしたかのように、よみがえって来たが、花井勝美会長なしでは語れない話で、見えない糸で繋がっているような気がしてならなかった。